

軍事史学

第57巻 第4号

巻頭言

戦争博物館の最前線

剣持久木

二十世紀末ごろから世界の戦争博物館の様相が大きく変化している。伝統的な戦争博物館の姿は、日本の遊就館は極端としても、基本的には自国の戦争を肯定し愛国心の涵養を目指すイメージであった。それが、文字通り「国境を越える」博物館という姿が現れてきたのである。本誌に寄稿しているアネット・ベツケル氏が学術委員会に関わっているペロンヌ第一次世界大戦歴史館が冷戦終結後に開設されたのを嚆矢として、世紀末に全面改装されたロンドン帝国戦争博物館、二〇一四年に新装開館したドレスデン連邦軍事史博物館が、三大「越境」博物館と言えるだろう。中規模の博物館としては、第一次世界大戦百周年の機会に改装されたヴェルダン記念館、二〇一四年に普仏戦争激戦地グラウヴロットに新装開館した一八七〇年戦争併合博物館も、その越境性が特徴的である。つまり、いずれの博物館においても、複数の国、特に旧交戦国の専門家が国境を超えて学術委員会を構成しているのである。もちろんヨーロッパの現状が全て楽観できるわけではない。最も大きな期待を背負って開館したはずの、初めての本格的な第二次世界大戦博物館（ダンスク）が、ポーランドの政権交代による政権の保守化のあおりを受けて、（アンリ・ルソーを筆頭とした）国際的な学術委員会が解散し、開館直後に館長が解任されている。

とはいえ、「明治日本の産業革命遺産」のユネスコ世界遺産登録の際の約束であったはずの産業遺産情報センターの展示内容が、逆に日韓対立の火に油を注ぐような混乱を招いてしまった日本に比べれば、ヨーロッパの状況が遥かに先を行っていることは間違いない。特にフランスにおいては、日韓関係と比較される歴史認識の棘となっているアルジェリアとの関係についても、大統領のリーダーシップによる大きな前進があった。中でも注目されるのが（本誌でルソー教授が話題にしたテロリズム博物館と並んで企画されている、当該二国間関係の）歴史博物館構想である。

もちろん、日本にも秀吉の朝鮮出兵（壬辰倭乱）の基地であった名護屋城跡の韓国側からも評価されている日韓交流史の歴史博物館など、ささやかな試みもないではない。とはいえ近現代における戦争や植民地支配を巡って歴史認識問題を抱える日本にとって参考にするべきなのが、ヨーロッパで進行中の国境を超えた戦争博物館の最前線ではないだろうか。

（静岡県立大学）